
うすべにあらし（下）

桜アサノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うすべにあらし（下）

【Nコード】

N4003S

【作者名】

桜アサノ

【あらすじ】

ずっと同じように過ぎていた日々の中で、猫に招かれた先とは。

(前書き)

ファンタジーというよりホラーかとも思いましたが。怖いというよりは不思議系の話なんじゃないかと思っています。

気が付けば、小高い場所に出ていた。

公園というには、少々殺風景か。遊具の類等何一つなく、ぽっかりとあいた、空間。

自分の住む街に、このような場所がある事も知らなかった、と端から見下ろせば、建物と道路が広がる。

箱庭、という言葉が思い浮かぶ。

「にゃあ」

すっかりさくらの事を忘れていた。

どうだ、とでも言いたげに、見上げてくるさくらの瞳に赤い光を認めた。

それで気が付く。

ずいぶん時間がたっているらしい。

日が、暮れようとしていた。

と、その時。

ざあっと風が吹いた。

「あ」

視界が染まる。

最初は何が起きたのか、わからなかった。

……花びらだ。

桜の花びらが何処からか、一面に風に舞い上げられ、渦巻く中心に、私はいた。

全てが、薄紅になった世界。

風に、反射的に細くなった目が、それでもとらえる。

桜の古木。

「……こんなところに」

古い木ほど、幹の色が黒ずみ、花の色が映えると聞いた事があったが。

だとすれば、この木は、一体どれだけここに在ったのだろうか。

両腕を伸ばしても、抱えきれないような太いそれは、誇らしげに枝を伸ばし、春の訪れを告げていた。

ずっと、忘れていたように思う。

自分の住む此処が、四季を持つ、という事を。

確かに、暑くなれば、エアコンに自然に手が伸び、秋めいて涼しくなってきたら、コートを羽織り。そういった生活で、季節の移り変わりは気が付いているつもりでいたが。

こうして、視覚で、季節を感じるという事を、ずっとしていなかった、と。

誰の目に触れなかったとしても、木は、葉を繁らせ、やがて色づいて落とし、寒さを乗り越えてそしてまた、花開く。

当たり前のようにでいて。

それは、尊い、営みで。

——人も、そんな流れの中の、ほんの一部であるのだ、という事を。

その日、闇が迫ってくるまで。

私は黙って、桜を見つめていた。

さくらが何を考えて——いや、考えていたのかどうかもわからないが——私をこの場に導いたのかはわからないが。

心休まる休日であった事だけは確かだ。

あれから、ふらりと散歩に出ても、あの場に辿り着いた事はない。

さくらとも、会う事はなかった。

聞いたところによれば、さくらは、私の友人のそのまた知り合いの猫で、預かったのも初めてだったのだという。

まあ、そんな間柄の猫を、何故私に任せたのか、という疑問も残るのだが。

出会い、等、そんな偶然にも見える積み重ねの結果なのかもしれないかった。

だから私は。

何もない休日、行き当たりばつたりに街を歩く。

また、さくらに。

そしてあの、桜の古木に。

何処かで出会うかもしれない、偶然を探して。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4003s/>

うすべにあらし（下）

2011年10月8日19時16分発行